

内容のある記事を書くには、情報収集や徹底した観察、取材が不可欠。中でも、充実したインタビュアができるか否かは、重要な要素になります。今回は生徒の一人が修学旅行をテーマに、取材・インタビュアをするので仮定して、一連の流れと留意点を、辰濃先生にまとめていただきました。

## 「インタビュアではホンネを聞こう」

インタビュアの成否は、記事のできふきを左右する。充実したインタビュアができたと思うときは、大体、いい記事が書けるし、逆に、どうも決定打になる話が出なかったなと思うときは、記事に精彩がない。面接取材は記事のななめだ。

インタビュアの留意点を参考のために列記しておきたい。たとえば「修学旅行」のことをまとめてかなり長い記事を書くという場合を想定していただきたい。

① 予備取材をする。記事を書くあなたは学友と一緒に修学旅行に行くだろう。旅行中のあなたは大いに楽しむだろう。楽しみながらもしかし、全行程が「予備取材の時間」だということをお忘れないうでもらいたい。学友たちの行動、会話を詳細に観察し、記録する。

② 予備取材の過程でいくつかの主題を探す（人気のあった画像のこと。祈りとなにか。おいしかった食べものなど）。いい主題を探り当てることができるかどうか、記事の成否

はここにもある。

③ 旅行の間、多くの人から話を聞く。旅のさなかでも、インタビュアは始まっているのだ。自由行動のとき「道にうずくまっているおばあさんがいたので、背負って家まで送っていった」という仲間がいたら、詳しく話を聞いておく。情報収集のオニになる。

④ 旅行後、主題をさらに明確にしぼることができたら、その線に沿って、改めて何人かにインタビュアを申し込む。なるべくたくさん質問を準備しておく。質問のあらましを事前に相手に知らせておく。

たとえば「今度の修学旅行はどうだった？」「なにが一番印象に残った？」などというおどろおどろきな質問は避ける。中宮寺で恐ろしく熱心に弥勒像を見つめていた学友がいたとすれば、「弥勒像に感じ入っていたね」と具体的なことを尋ね、理由を聞く。相手が答えやすい具体的な質問から始める。

⑤ 取材の場所には約束の時間前に着く。相

手に気持ちよくしゃべってもらうには、絶対に遅れてはいけない。5分前、10分前には、約束の場所に着いているのが礼儀だ。

⑥ 取材の結果が紙面に載ったら、掲載紙を手渡しして礼を言う。記事を書くことは人との付き合いの基本を学ぶことでもある。

今回は修学旅行の例を書いたが、文化祭、運動会、社会科見学のことなどを書くときも事情は同じだ。

いいインタビュアをするには、相手のことを深く知ること。深く知れば知るほど質問が急所をつく。的を射た質問が続けば、相手は心を開く。心を開いた人は、ホンネを話してくれる。ホンネを聞けるようになれば、そのインタビュアは成功だろう。

もう一つ、インタビュアで大切なのは、雑談だ。私の経験では、予定の質問もすべて終わった後、相手と雑談をしているときに「とっておきの話」がぼろっと飛び出すことが何度もあった。雑談をバカにしてはいけない。



●たつの・かずお  
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。